

時間がすぎるという感じについて

佐金 武 (Takeshi Sakon)

大阪公立大学大学院文学研究科

時間の経過の存在をめぐるとの陣営の論者もその多くが、時間がすぎるという感じには否定しがたい一定のリアリティがあり、少なくともそれに言及することは避けられないと考える。時間それ自体の動性を肯定するのであれば否定するのであれば、われわれの経験や現象に関わる限りでの時間特有の「すぎるという感じ」には抗いがたい何かがあるというのである。ただしこれは、時計を見て「もう5分がたった」というような、何らかの推論を含む単に認知的な判断ではない。ここで問題になるのはあくまで、知覚経験により近い意味での時間がすぎるという感じである。

本発表では、この時間がすぎるという感じに関連するこれまでの議論を整理したうえで、独自の見解を提示したい（少なくとも、その方向性を示したい）と考えている。そのためにはまず、時間がすぎるという感じが何に起因すると考えられ、どのような観点から分析されるべきかを検討する必要がある。拙論 [佐金 2023: 14] において私は、少なくとも次の5つの可能性があることを示唆した。

1. 時間がすぎるという感じはそれ特有の真正な経験内容をもつ。
2. 時間がすぎるという感じはそれ特有の経験内容をもつが、これは完全な幻覚である。
3. 時間がすぎるという感じは、運動やその他のものの変化の知覚に還元されるような経験内容をもつ。
4. 時間がすぎるという感じは経験内容を構成するというよりは、経験に対する副詞、あるいは経験内容に対する修飾詞として働く。
5. 時間がすぎるという感じは知覚経験に関係するものではなく、記憶や予期を含む認知的推論により形成される信念にすぎない。

これら5つのオプションについて、私はおよそ次のような見通しをもっている。

まず1つ目のオプションは、時間の経過が文字どおり存在すると考える時制理論（とりわけ、「動くスポットライト説」や「成長ブロック説」）が真であることを含意する。2つ目のオプションは、時間の経過に関する「錯覚説」に他ならない。3つ目のオプションは、時間の経過をもの運動や変化と同一視する「還元主義」の立場に帰着する。4つ目のオプションは、あるものがぼんやり見えるというときのような、知覚経験における副詞的な働きを時間に認める「副詞説」の立場であり、（時間の経過が存在するかどうかという問題は回避されるため）通常は観念論に分類される考えといえるかもしれ

ない。最後に、5つ目のオプションは、時間がすぎるという感じは何らかの認知的なプロセスを通じて形成された信念にすぎず、実際にはそのようなそのような知覚経験は存在しないと主張する立場であり、「無経験説」と呼ぶのが適切であるように思われる。

本発表ではこれら5つのオプションを批判的に検討した後、時間経験に関する還元主義と副詞説によるハイブリッドな見解を提唱する。その際、還元主義だけでは説明不可能な時間がすぎるという感じに言及し、副詞説のもっともらしさを指摘する。また逆に、経験に対する副詞としての時間的な変化は、ときとして視覚経験にみられる副詞的な働きとは異なり、外部の変化を表象するうえで不可欠である（変化しないものによって変化を捉えることは不可能である）ことを論じ、内容における変化とともに経験それ自体にリアルな変化が認められるべきことを主張する。結果、還元主義的な副詞説は観念論ではなくむしろ、経験するものとされるものを貫く「変化の实在論」に接近することになるだろう。

引用文献

佐金 武 (2023) 「現代時間論の哲学史的意義について」, 『科学哲学』第 55 卷 2 号: 3-18.

* 本発表は JSPS 科学研究費 (23K00012) の支援のもと行われる。